「人間の思惑を超えて」 ２０２３ 年 1 月 15 日

サムエル記下 １７章１節～２９節アヒトフェルはアブサロムに言った。「一万二千の兵をわたしに選ばせてください。今夜のうちに出発してダビデを追跡します。疲れて力を失っているところを急襲すれば、彼は恐れ、彼に従っている兵士も全員逃げ出すでしょう。わたしは王一人を討ち取ります。兵士全員をあなたのもとに連れ戻します。あなたのねらっておられる人のもとに、かつてすべての者が帰ったように。そうすれば、民全体が平和になります。」この言葉はアブサロムにも、イスラエルの長老全員の目にも正しいものと映った。アブサロムは、「アルキ人フシャイも呼べ。彼の言うことも聞いてみよう」と言い、フシャイがアブサロムのもとに呼び出された。アブサロムは言った。「これこれのことをアヒトフェルは提言したが、そうすべきだと思うか。反対なら、お前も提言してみよ。」 フシャイはアブサロムに、「今回アヒトフェルが提案したことは良いとは思えません」と言い、 こう続けた。「父上とその軍がどれほど勇敢かはご存じのとおりです。その上、彼らは子を奪われた野にいる熊のように気が荒くなっています。父上は戦術に秀でた方ですから、兵と共にはお休みにならず、 今ごろは、洞穴かどこかを見つけて身を隠しておられることでしょう。最初の攻撃に失敗すれば、それを聞いた者は、アブサロムに従う兵士が打ち負かされた、と考え、 獅子のような心を持つ戦士であっても、弱気になります。父上も彼に従う戦士たちも勇者であることは、全イスラエルがよく知っているからです。わたしはこう提案いたします。まず王の下に全イスラエルを集結させることです。ダンからベエル・シェバに至る全国から、海辺の砂のように多くの兵士を集結させ、御自身で率いて戦闘に出られることです。隠れ場の一つにいる父上を襲いましょう。露が土に降りるように我々が彼に襲いかかれば、彼に従う兵が多くても、一人も残ることはないでしょう。父上がどこかの町に身を寄せるなら、全イスラエルでその町に縄をかけ、引いて行って川にほうり込み、小石一つ残らなくしようではありませんか。」アブサロムも、どのイスラエル人も、アルキ人フシャイの提案がアヒトフェルの提案にまさると思った。アヒトフェルの優れた提案が捨てられ、アブサロムに災いがくだることを主が定められたからである。 フシャイは祭司ツァドクとアビアタルに言った。「アヒトフェルはアブサロムとイスラエルの長老たちにこれこれの提案をしたが、わたしはこれこれの提案をした。急いで、使者をダビデに送り、こう告げなさい。荒れ野の渡し場で夜を過ごさず、渡ってしまわなければなりません。王と王に従う兵士が全滅することのないように。」ヨナタンとアヒマアツは、都に入って見つかってはならない、とエン・ロゲルにとどまっていた。使いの女が行って二人に知らせ、彼らがダビデ王に伝えに行くことにしたのである。ところが一人の若者が彼らを見てアブサロムに知らせたので、彼らは急いで立ち去り、バフリムのある男の家に入った。その家の内庭に井戸があったので二人はその中に降り、その家の妻が井戸の上に覆いをかけ、その上に脱穀した麦を広げた。何も気づかれることはなかった。アブサロムの部下がその家の妻のところに来て、「アヒマアツとヨナタンはどこにいる」と言った。女が、「ここを通り過ぎて川の方へ行きました」と言うと、彼らは捜しに行き、発見できずにエルサレムへ戻った。彼らが去った後、二人は井戸から上って来てダビデ王のもとに行き、こう知らせた。「直ちに川を渡ってください。アヒトフェルはあなたたちを討つためにこういう提案をしました。」王は同行していた兵士全員と共に、直ちにヨルダンを渡った。夜明けの光が射すころには、ヨルダンを渡れずに残された者は一人もいなかった。アヒトフェルは自分の提案が実行されなかったことを知ると、ろばに鞍を置き、立って家に帰ろうと自分の町に向かった。彼は家の中を整え、首をつって死に、祖先の墓に葬られた。ダビデがマハナイムに着いたころ、アブサロムと彼に従うイスラエルの兵は皆、共にヨルダンを渡った。アブサロムはヨアブの代わりにアマサを軍の司令官に任命した。アマサはイトラというイスラエル人の子で、イトラの妻はナハシュの娘アビガル、ヨアブの母ツェルヤの姉妹だった。 イスラエル軍は、アブサロムに従ってギレアドの地に陣を敷いた。ダビデがマハナイムに着くと、ラバ出身のアンモン人ナハシュの子ショビ、ロ・デバル出身のアミエルの子マキル、ロゲリム出身のギレアド人バルジライとが、 寝具、たらい、陶器、小麦、大麦、麦粉、炒り麦、豆、レンズ豆、炒り麦、 蜂蜜、凝乳、羊、チーズを食糧としてダビデと彼の率いる兵に差し出した。兵士が荒れ野で飢え、疲れ、渇いているにちがいないと思ったからである。

使徒言行録 １８章１８節～２１節パウロは、なおしばらくの間ここに滞在したが、やがて兄弟たちに別れを告げて、船でシリア州へ旅立った。プリスキラとアキラも同行した。パウロは誓願を立てていたので、ケンクレアイで髪を切った。一行がエフェソに到着したとき、パウロは二人をそこに残して自分だけ会堂に入り、ユダヤ人と論じ合った。人々はもうしばらく滞在するように願ったが、パウロはそれを断り、「神の御心ならば、また戻って来ます」と言って別れを告げ、エフェソから船出した。

１， アヒトフェルとフシャイアブサロムの反乱の第一歩は、大成功に終わりました。彼は、かつてダビデの中まであった人々を引き連れて、首都エルサレムを占拠したのです。ダビデは這う這うの体で逃げ延びます。

アブサロムとその臣下の者たちは勝利を確信しますが、すみやかにダビデを捕らえ、打ち倒さなければ戦いが終わったとは言えないことをわきまえておりました。そこでアブサロムは、かつてのダビデの家臣であり、アブサロムに寝返った男。アヒトフェルに、この反乱が勝利に導かれるための助言を求めるのです。このアヒトフェルという人物。かつてのダビデの側近であり、老練なる戦術家でありました。しかしバト・シェバの祖父でありました。彼はダビデ王によって愛する孫娘の結婚が破壊されたという、その恨みのゆえにアブサロムの側に付いたのです。アブサロムはこのアヒトフェルに、どのようにしてダビデを討ち取るか、最善の策を尋ねます。するとアヒトフェルは、ダビデを捕らえることを最優先し、ダビデを倒せば、従っている兵士たちも戻ってくるだろうと語ります。王さえ捕らえて殺してしまえば、この戦いは勝利なのです。なぜなら死んだ王のためになお戦う者はいないからです。しかしそのためには、ダビデがヨルダン川を渡り切らないうちに、できる限り早くダビデを討ち取りにいかなければなりません。今夜のうちに出発して、ダビデを追跡します。そう語るアヒトフェルは、自分がその軍の先頭に立ってダビデを討ち取ろうと考えていたのかもしれません。この提案は、アブサロムにも、イスラエルの長老全員の目にも正しいものと映った、とあります。本当に、アヒトフェルの策こそが最善の策であり、もっとも現実的な戦い方でした。このままこの策が用いられていたならば、ダビデの命はここで終わっていたでしょう。しかしここでアブサロムは、ふと思い立って、フシャイの意見をも聞いてみようと考えたのです。しかしこれがアブサロムの人生の命運を決定することとなるとは思いもしなかったのでしょう。まさにそこに、神の御摂理が働かれたのです。ダビデはアヒトフェルが、この反乱に関わっていると聞いたとき、裏切られた悲しみの中でこのように神に祈りました。「主よ、アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。（15 章 31 節）この祈りが、フシャイがスパイとなって敵側に潜入し、アヒトフェルの作戦を覆すことによって実現したのです。

フシャイは、アヒトフェルの作戦が優れていて、もし採用されるならダビデの敗北が決定するとわかっていましたので、なんとしてもこれを覆さなければなりませんでした。フシャイの意見はこのようなものでした。ダビデのその軍勢は強い。それに対して、より大きな力で対抗しなければならない。だからもっと多くの兵士を集めよう。そうすればダビデ軍は少数であるから、必ず打ち破れるだろう。もし必要ならば、ダビデが逃げ込んだ町を包囲すればよいのだと。しかしこの作戦には大きな欠点がありました。一つは、それほど多くの人数を招集できるほど兵士はいなかったということ。もう一つは、招集している間に、ダビデは、アブサロムが追跡できないようなところまで逃げてしまい、ダビデ側に反撃のチャンスを与えてしまうということです。これは機智にたけた人ならば容易に気づくはずの落とし穴でした。しかしアブサロムは、自分が軍の先頭に立って戦いに行くという、アブサロム自身の野心、虚栄心をくすぐるこの作戦に心が傾きます。あるいはフシャイの言葉巧みな語り方には、多くの落とし穴を見抜けなくさせる何らかの説得力があったのだと思います。アブサロムはアヒトフェルの作戦を却下し、フシャイの作戦という間違った選択をしてしまうのです。しかし 14 節には「アブサロムに災いがくだることを主が定められた」とあります。この出来事もまた、神の御心なのでした。

２， 優位に立つダビデフシャイはスパイとして、敵の中に入って彼らの作戦を覆すことに成功すると、皆に知られないところで、ダビデ陣営の祭司であるツァドク、アビアタルに伝えるのです。荒れ野の渡し場で夜を過ごさずに、今夜中にヨルダン川を渡ってください、と。伝言は祭司たちから、二人の使い、ヨナタンとアヒマアツに託されました。しかしこのことを伝える中でも、彼らはアブサロム側の若者に探知され、アブサロムに報告され、危うく捕らえられそうになります。しかしバフリムという町のダビデ側の支援者によって助けられ、井戸に隠れることによって事なきを得ます。すべてがぎりぎりの状況の中で、このおかげで、ダビデはアブサロム軍の危険から脱出することができたのです。そこにも神の導きが確かにあったのです。この伝言は、無事にダビデの耳に入り、ダビデの陣営は全員、夜の内にヨルダン川を渡ることができたのでした。

３， アヒトフェルの自殺さて、自分の優れた作戦を却下されたアヒトフェルは、なんとこのあと自殺してしまうのです。なぜ彼は自殺したのでしょうか。フシャイの作戦が自分の作戦よりも優先されてしまったことへの失望もあったかもしれません。

そこで改めてアヒトフェルは気づいたのでしょ。アブサロムの未熟さ。王としての資質のない男であったことに。

アブサロムの側に付いて、ダビデに復讐しようとしたことは間違いであった。この戦いは間違いなく敗北に終わる。そう悟ったアヒトフェルは、やがて自分に与えられるであろう屈辱をも想像しました。それならば、自ら命を断った方がましだと考えたのでしょう。彼は自分の家に帰り、身辺整理をしてから首を吊るのでした。しかし、このアヒトフェルの死。これはとても悲しい最期であると思うのです。他に、聖書の登場人物の中で、自殺する人がおります。イスカリオテのユダです。ユダとアヒトフェルには一つの共通点があります。アヒトフェルはダビデを裏切り、イスカリオテのユダは主イエス・キリストを裏切りました。そこに共通点がある。しかし彼らのような死に方はおよそ、神を信じる者の死に方とは言えません。神を信じる者とは、何があっても絶望しない人のことであります。私たちは、誰でも人生において一つや二つ、大きな失敗をすることがあると思います。失敗のない人生などはないと思います。しかし、どんな失敗をしたとしても、自殺をしてはいけないのです。なぜなら、それはわたしたちのために死んでくださった主イエス・キリストの十字架の恵みを無駄にすることだからです。十字架とは、わたしたちの人生のすべての罪を。そしてすべての失敗の責任を主イエス・キリストが負ってくださったということだからです。わたしたちは、どんなに道を踏み誤ったとしても、なお生きることを主から求められているのです。だから自分から命を断ってはいけないのです。わたしたちはこの主の十字架の下で、罪も、失敗も、苦しみも、悲しみも、神様の恵みの下に受け止められている。もし自分の歩んできた道が誤っているとわかったならば、神様の御前に立って悔い改める自由がいつも与えられております。主は、どんな状況からでも、そこからまた良き道を拓いてくださるのです。時にはそれはもと来た道を U ターンするような面倒なことでもあるかもしれません。しかし、自らその人生を終わらせるよりもはるかに素晴らしい道なのです。もちろん、心の病気だとか、事故で、自殺を選んでしまった人のことを悪く言うつもりはありません。その人にとって、それはどうしようもない行き詰まりの中の唯一の選択であったのかもしれません。しかしわたしたちは忘れないでいたいのです。キリストの十字架。それは、どんなときにも消えることのない希望なのだということを。使徒パウロはコリントの信徒への手紙二の第 4 章 8 節でこのように語ります。「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。」この御言葉は、古い信徒の方は文語訳で覚えておられる人の方が多いと思います。「詮方尽くれども、望みを失わず」と。なぜなら、十字架を仰ぐところには、いつも主イエスの命が働いているからです。

ある人がこのように語っております。「信仰を与えられているということは、いつでも十字架の主イエス・キリストから自分の人生を見直すことができるということです。そして自分の人生を十字架の主イエスから受け取りなおすことができるということです。」主がわたしたちの人生を、十字架の下に置いてくださっている。だからどんな人生であってもそれは神様の御前に贖われ、良しとされる。そうであるならば、最後まで、生き抜くことが求められるのです。主が深い愛の眼差しをもって天から見つめておられるからです。

４， 御心ならば

さて、さきほど使徒言行録の第 18 章、18 節から 21 節までを読んでいただきました。使徒パウロは、第二回宣教旅行の最後に、エフェソに滞在し、そこにいたユダヤ人と少しの間論じ合ったとあります。神学論争をしたというのではなく、もっと良い交わりを伴う対話をしたようです。しかし別れの時がやってきました。エフェソのユダヤ人たちは、別れを惜しんでもうしばらく滞在するように願いますが、パウロはそれを断って、このように告げます。「神の御心ならば、また戻って来ます。」そう言って別れを告げました。実は、このエフェソの町は、先に通過したところであり、16 章 6 節にこのようにあります。「アジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられた」と。そのアジア州の代表的な大都市がエフェソなのでした。なぜ聖霊が禁じられたのかはわかりません。しかしパウロは熱心な祈りの中で日々聖霊に満たされておりましたから、神様の御心ははっきりと示されていたし、そこに忠実でした。パウロは、いつも神の御心をたずねながら伝道していたのです。御心ならばまた戻ってくることもあるでしょう。そうでないなら、もう戻ることはないでしょう。それは神のみが知っておられるわたしたちの将来です。わたしたちはその人生の最後まで、鳥瞰図のように全体を見渡すことができるわけではありません。いつもそのすぐ先のほう、先の方だけが見えている。少し丘を上がれば、次の景色が見える。その繰り返しであります。しかしわたしたちの主人である神様が、わたしたちの人生の全体をすでに把握してくださっている。ご計画を立ててくださっている。そのことを信じて、主に従って一歩一歩を歩んでいくとき、主が私たちの人生に、主権をもって導いてくださっていることがわかってくるのです。主に従うとは、聖書の御言葉に従うことです。御言葉の伝えるその約束の一つ一つを信じることです。わたしたちにも自分の思いはあります。大きな願いもある。夢もある。それを主に願ってもよい。しかし、神の御心のみが成ります。主なる神の御心こそが、最も良いものであるからです。そのことを本当に重んじていくならば、私たちを通してこの地上で神の御栄光が豊かに表れていくのです。

 ですから、わたしたちは様々なことを祈りの中で願い、さまざまな計画を立てていく。そのすべてにおいて主の御心が成りますようにと願っていきたい。わたしたちが、自分の願いよりも神の御心の方を重んじていくならば、それは私たちの信仰がうんと成長した証しであると思います。わたしたちは日々の祈りの中で何を祈り願ってもよいのです。しかし最後にわたしたちは、こう願っていきたいのです。御心ならば、と。

アヒトフェルとアブサロム。この人たちは、神の御心に逆らってイスラエル王国を覆そうとしましたが、その結果自ら命を断つ道を歩むこととなりました。人間の思惑を超えて、神の御心は必ず成ります。しかしそうであるならば、神に逆らうのではなく、神に従順に従いとおしたいのです。わたしたちの人生においても、神の御心が成りますように。神がわたしたちの人生を通して栄光をあらわしてくださいますように。わたしの栄光ではなく、神様、あなたの栄光が成りますようにと願っていきたいのです。お祈りをいたします。

教会のかしらであられる主イエス・キリストの父なる御神様。わたしたちの人生を通してあなたがご自身の栄光をあらわしてくださいます。主の栄光の器として用いられる幸いを心から感謝いたします。私たちはともすると自分の勝手な思いを先立たせて、神の御心をたずねずに歩んでしまったことがあります。そのような中で罪を犯し、行き詰まり、途方に暮れました。あなたが共におられるのに、十字架を見上げることを忘れていました。主よ、どうか、あなたの御心に従わずに歩んだ私たちの日々をお許しください。今日から始まるわたしたちの歩みがいつも、あなたに心をささげ、時間をささげていく歩みとなりますように。ただ神にのみ栄光あれと願う、宗教改革者カルヴァンのような信仰を私たちにもお与えください。主よ、心から感謝いたします。あなたは「主の山に備えあり」という聖書の約束を私たちの教会においても果たしてくださいました。新しい年度の牧師が備えられたことを心から感謝いたします。どうか主よ。わたしたち諏訪教会のこれからの歩みが、あなたの大きな御計画があることを信じて、全幅の信頼をもって仕えていくことができますように。これからの歩みを祝し、あなたの御栄光をあらわす教会として立ち続けていくことができますように。教会から離れておられる兄弟姉妹が多くおられます。高齢のために、礼拝に集うことのできない方々の上に、体の調子を崩しておられる方々の上に、厳しい病と闘っておられる方々の上に、どうぞ主よ今週も慰めと励ましをお与えくださいますように。この言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン